
ネギま！転生ですよ！

ヨシキン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！転生ですよ！

【Nコード】

N6170K

【作者名】

ヨシキン

【あらすじ】

二次SSに興味があつた主人公が天使によってネギま！の世界に
とばされて自分が想う信念に乗っ取って生きるお話です。

駄文ですが読んでもらえるとうれしい限りです。

プロローグ1（前書き）

初執筆になります。

一話一話が短くなる予定で駄文ですが読んでもらえるとうれい
です。

プロローグ1

初めまして、名前は暗夜桜花^{あんや おうか}と申します。

女子みたいな名前だけど生物学上男として生を受けました。

小さし頃は嫌でしたが17年も共にすると受け入れられるモノです。
あつ趣味は二次サイト巡りです！中でも好き勝手に暴れるオリ主には憧れま「あの〜いいですか〜？」

「なんでしゅか、人が現実逃避してるときぐらいそつとしておいてください！」

痛い…現実に戻されて噛んでしまった。意識を現実に戻すと目の前にはちよと困惑している天使がいる。

「それでここはどこなのでしょう？」

ブログ1（後書き）

話が全然進んでいません。

更新こまめにやって早く進められるように頑張ります。

プロローグ2（前書き）

また今回も短いですが読んでもらえるとうれしいです。

プロローグ2

僕の問いかけに天使はまじめな表情を作り

「ここは、死後の世界です。と言いましても天国でも地獄でもありません。」

「では、ここはいったいどこなのですか？」

天国でも地獄でもないとしたらここはいったいどこなのだろう？

「ここは転生の空間です。といえますか、あなたはなぜ死んだのかは疑問に思わないのですか？」

「そうだ！なぜ僕はし「ええ、お答えしましょう」か？」

この天使絶対説明好きだ！見た目もナデシコのイネスさんに似てるし。

「お願いします。」

「おほんっ！それでは説明しましょう。あなたは夜中に一家心中で死にました。本来なら自殺は問答無用で地獄行きですがご両親が何の罪もない息子を地獄まで道ずれにするのはしのびないと閻魔大王に100年ほど泣きつきまして、その間ほっとかれたあなたは転生の輪からもういないものと判断されたらしくこの世界にいても消滅しか残されていないあなたを神様が不憫に思われこの度違う世界に転生させるということが決定し閻魔様もやっと安眠できると喜んでおられました。」

うわぁゝ家の両親なにしてくれちゃってんのさ。ん？でも

「違う世界っていうのはどこなんですか？」

「ネギま！の世界です。」

プロローグ2（後書き）

次話で転生の準備と能力の話になります。

プロローグ3（前書き）

駄文ですが読んでくれた人がたくさんいてとってもうれしいです。
これでプロローグは終わりです。

感想やアドバイスなどがありましたらお願いします。

プロローグ3

「まじですか！」

「ええ、本当です。それから、能力を授けます。5つぐらいまでなら叶えましょう。」

「（マジかあ）。それなら能力と言ったらあれだよな！）まず無限のけ「無理です。」い。なら、王の「無理です。」う。だったら、気と魔力むげ「それも無理です。」ん。それならどのような能力ならもらえるのですか？」

「最初から強力な能力は与えられません。それをふまえた上で考えて下さい。」

なる程、最初からチートにはなれないのか。……………ん？だったら

「それならまず、気と魔力、それに付随して肉体の成長限界を無くして下さい。」

「ちょっと待って下さい。……………OKです。」

よし！最初からはダメと言われたから、ならば限界無しと考えたがなんとか通ったな。

「では、後4つです。」

「では、不老不死は可能ですか？」

「それは、……………OKです。」

「よしつ。次は脳の強化はできますか？」

「具体的にはどのような事ですか？」

「そうですね、まずは理解力と応用力。できれば、並列思考も出来ると嬉しいのですが、どうでしょうか。」

「……………OKです。が、並列思考は3つまでで、それを4つ目の願いにするならば可能です。後一つはどうしますか？」

おお、OKか。でも後一つはどうするかな？実際これだけあればネギま！でも十分やっていけると思っんだが……………っ！そうだ、ちょっとダメ元で頼んでみよう

「最後は、能力じゃなくてネギま！の世界に行く前に特殊空間で修行させてもらえないでしょうか。」

「……………OKです。修行空間の設定などは何がありますか？」

「その前にちよつといいですか？なぜ許可がでるまでだんだん時間があくんですか？」

「それは簡単な事です。異世界転生委員会による話し合いにより採決をとっているからです。」

簡単じゃないし。そんな委員会あるなんて思わないっすよ。まあいいか。

「わかりました。設定は重力変更可能で、食と住 があればOKです。後は、ネギま！の世界の魔法書があればうれしいです。」

「ちょっと待って下さい。」

…………… 一時間後……………

「OKが出ました。まず、重力は10～300倍まで変更可能です。ついでに気温も-50～+50 まで、酸素も十分の一まで減らせるようにしておきました。本の方も大丈夫です！それでは100年ほど修行してきて下さい。」

その言葉を聞いた途端に俺の体は光を放ち始めた。

「あつ、そうでした。100年後精神とか壊れていたら消滅させますから頑張ってくださいね！」

「えっ？ちよっ……………」

俺は最後まで言葉を発する事ができずに修行空間に飛ばされた。

…………… 100年後……………

「ふうっ！後一週間で100年か。明日からは元の重力にして体を慣らさないダメだな。」

俺はベッドに横になりながらこれまでの修行を思い出していた…

初日は10倍の重力に体が対応出来ず、這って進むのがやっとだった

た。それから10日で歩けるようになり2ヶ月後にやっと普通に生活できるようになった。

それから五年かけて本を読んで魔法の体系や術式を理解していった。

それから50年かけて今まで漫画などで手に入れた格闘、戦闘術を身につけ昇華させていった。このころには重力100倍でも苦にはならなくなり始めていた。

そしてそれから、突いて突いて突きまくった！まずは肉体強化を使わないで一万本それから気で、そして魔力で強化してから一万本突いていった！10年間突く事と感謝の時間に当てたら三万本突き終わるのに一時間を切っているのに気がついた！その時はなぜか歓喜の涙が流れてきた。死ぬまでの17年間は何かを達成したことはなくその一歩手前でいつも諦めていた自分が、一つの物事を達成するという事を成し遂げれたことが嬉しくてはたまらなかった。

それから時間は感謝の三万本と戦闘訓練にあてていた。
90年目に根性と書かれた木刀を見つけその居合いも次の日から三万本追加して修行に励んだ。

……回想終了……

元の重力に戻して一週間は今の自分の力を把握することに努めた。そして体が発光し始めた俺は100年お世話になった修行空間に一礼して天使の待つあの空間に戻って行った。

「100年振りですが、どうやら大丈夫のようですね。ではあなたがこの世界に留まれる時間も少なくなってきましたので、ネギま！の世界に送ります。」

俺の様子を確かめた天使はそう告げるとまた俺の体が発光し始めた。俺は天使に頭を下げ

「ありがとうございました。」

とお礼の言葉を口にした。

それを聞いた天使は微笑みながら

「向こうでは、悔いの無いように人生を歩んでくださいね。」

その言葉を聞いた俺は意識を失った。

つていつの時代に行くのか聞いてねえ！
最後にポ力をやらかして

プロローグ3（後書き）

次回からネギま！の世界に入っていきます。

能力紹介（前書き）

お気に入り登録してくれた方。また作品を読んできた方々本当にありがとうございます。

前回書き忘れたのですが桜花は最終的に300倍の負荷で修行しています。

能力紹介

主人公

暗夜 桜花

(アンヤ オウカ)

外見年齢

17才

容姿

純日本人（黒目、黒髪、長さは膝までの長さになりストレート。）
顔は100年の修行で精悍さがまし十人中八人位が見とれる感じ
です。

性格

生き物が大好き

見た目ではなく中身が重要と何時も思っている。

傷ついているものは外見であれ内面であれ気づきどうにか癒そうと
する優しい性格をしている。また、そういう存在を傷つける存在は
相手が何であろうとも立ち向かう男である。

助けられたら人はその優しさに惚れてしまうのだが消極的なアプロ
ーチしかできず、動物たちはストレートなのでそれも相まって動物
にはモテるのになあと思っている鈍感君でもある。

能力

気、魔力、肉体の限界解除（最初からはチートは無理だと言われた
のでこれをあげたのだが100年の修行で十分チートになってしま
った。気は今のところ大戦時のラカンと同等。魔力は全盛期のエヴ
アよりちよつと劣るぐらいである。）

百式観音・撃

H×Hの某会長の技に憧れて修行して手に入れた技。しかし重力負荷付でやっていたため威力速度共に越えている。今は手加減出来るように修行中である。

百式観音・斬

根性木刀で修行した結果手に入れた。

その威力はオリハルコンさえも切り裂く。（試したことは無いです。ごめんなさい。）

気・魔力による身体能力増加

気や魔力を纏わなくても既に瞬動を超えているのだが纏うと速度、耐久、技の威力が跳ね上がる。今はただの魔力を纏うのではなく属性を付加出来るように修行中である。（闇の魔法のように内に取り込むのではなくただ纏った魔力に付加です。）

不老不死

これと限界解除のため能力がどこまでいくのかは未知数である。

並列思考

同時に3つまで考えることができる。

能力紹介（後書き）

まだ何時の時代に飛ばすか考え中です。

明日にはまた投稿できるように頑張ります。

ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。

出会い（前書き）

変更しました。

お気に入り登録10件突破です。

まだまだ短い文章しか投稿することができませんがこれからもよろしく願います。

出会い

目を開けるとそこは深い森の中だった。

「どこた？ここ。」

とりあえずなにやら向こうの方が騒がしいので向かってみることにした。

S i d e ？

「くっ。離せ！」

ここ数日に渡る襲撃に魔力も体力も限界に近づいていたところに50人もの魔法使いに囲まれてしまった！半分も倒した頃にととうと魔力が尽きてしまい捕らわれてしまった。

私を捕らえている奴らのリーダーらしき男がそうわめき散らしているのを尻目に従者に目を向ける。そこには魔力供給が切れたために動けないチャチャゼロが奴らの一人に縛られてころがされている。

ドガッ

「とりあえず街に連れて行くぞ」

リーダーらしき男に頭を殴られたらしい。だめだい……しき……が……

S i d e アウト

騒がしい場所に俺は到着すると

ドガッ

何かを叩く音が聞こえ、その音の正体確かめるべくのぞき込むと

「ツツ…」

女の子が二人の男に両脇から捕まれているのが目に入った。俺はそれを認めた瞬間に飛び出しそこにいた男達に百式観音・撃を放っていた。

ドゴシャッ

その撃の威力に原型を止めていない人だったモノを尻目に女の子を抱き抱えるとその場を離れようと足に力を込めたときにその声は聞こえた。

「マ…マテ…ゴシユジンヲ、ド…ドコニツレイクキダ！」

ツ！チャチャゼロか！ということはこの娘はエヴァなのか！

「危害を加える気はない。」

俺はそれだけ告げるとチャチャゼロも掴みその場から立ち去った。

出会い（後書き）

ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。
次回主人公の決意、そしてエヴァとの会話まで書けるように頑張ります。

共に在るもの（前書き）

お気に入り登録が日に日に増えてきています。

ありがとうございます。

これからも頑張って少しでもいい文章に頑張ります。

共に在るもの

（一時間後）

先程いた場所よりも更に森の奥深くに入り治療をした後に俺はチャチャゼロから先程の襲撃の話を詳しく聞いていた。

チャチャゼロの話したことは

- ・真祖になったことで魔法使い達に狙われ続けていたこと。
- ・決して自らは手を出さずに追っ手のみを撃退してきたこと。
- ・撃退する事により賞金首になり更に狙われ回数が増えたこと。
- ・そして今回の襲撃は今までのとは数が違い多くの魔法使い達が徒党をくんで連日連夜に襲撃されたことにより体力、魔力共に枯渇しとうとう捕まってしまったこと。

「そこに、俺が割って入ったということか。」

「アア、ゴシユジンヲタスケテクレタコトニハカンシヤスルガ、イツタイオマエハナニモノデ、ナニガモクテキデゴシユジンヲタスケタンダ？」

「俺の名前は暗夜桜花。目的…という訳じゃないがただ理不尽に陵辱されるものを放っておけなかったただだよ。」

俺は膝の上に頭を乗せ寝かせているエヴァの綺麗な金色の髪を撫でながらそう話していた。

俺はエヴァを助けるときに初めて人を殺した。ここにくるまでに、頭が冷静になるにつれその事を思い出し嘔吐感に襲われたが腕の中で眠るエヴァの温もりを感じることで俺は覚悟を決めた。俺は陵辱されるモノの力になろう。全ての…というのは無理なのはわかって

いる。だから俺は自らの手が、力が届く所を全力で守ろうと。そして奪った命の業を背負いこの人生を歩んでいこうと。

Side エヴァ

「俺の名前は暗夜桜花。目的……という訳じゃないがただ理不尽に陵辱されるものを放っておけなかったただだよ。」

意識が戻った私に聞こえてきたのはそんな声だった。どうやら私はこの男に助けられたらしい。近くにチャチャゼロがいるのも感覚でわかる。私は、頭を撫でられていることにふと気づく。なぜ私は、撫でられたままそれを感じている？自問自答する私は気づく。撫でられている所から感じるこの男の温かい波動を、私の心まで染み込んでくるこの温かさを、私の心が受け入れ……否歓喜していることに。そして私は理解する。私は温かさに飢えていたのだと。真祖の吸血鬼になってから100年以上の年月を独りで過ごしてきた。途中から従者として作ったチャチャゼロが共にいたがそれでも私の心は他人の温もりを求めていたのだろう。だがそう簡単に受け入れることが私にはできない。人間であるこいつと私では生きる年月が違う。

「ケケケ、ダガオマエガゴシユジンヲタスケタシテモ、イツカオマエニハジュニヨウトイウワカレガイツカオトズレル。ソシタラマタゴシユジンハヒトリ、コドクヲアユムコトニヤル。」

私が言いたいことをチャチャゼロが口にする。だがこいつは

「それならば心配ない。俺も不老不死の存在だ。……真祖ではないがな。エヴァンジェリン……エヴァが俺を拒絶しない限り俺は、この娘から自分から離れるつもりはないよ。」

「ケツ。モノズキナオトコダナオマエモ。」

「ふつ。これが俺なんだよ。」

その言葉を聞いた私は魂から歓喜した。この優しい存在がこれからも私と共に歩んでくれる。認めよう私は、寂しかったんだ。真祖となったあの日から、独り孤独に生きていく日々に絶望し、温もりを求めてさまよい続けたことを。

「これからも私と共にあり続けてくれるのか？これからもねらわれ続ける、厄介者でしかない私と共に。」

「言っただろう？エヴァが拒絶しないかぎり共に在ると。」

私が生きていたことに気づいていたのだろう、男は…いや桜花は優しく語りかけてきた。

「で…では誓え、私と共にあることを。」

「ああ、俺は……暗夜桜花はエヴァンジェリン・A・K・マグダウエルと共に、その生涯が終わるその時まで共に在ることをここに誓う。」

S i d e アウト

曇り空の隙間から覗く月光が二人を照らし、幻想的な光景の中で二人は互いに誓い合った。

まるで比翼の鳥が連れ合うようなその光景はチャチャゼロの魂に深

く
刻
ま
れ
た。

共に在るもの（後書き）

ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。
次回も早めに更新出来るように頑張ります。

旅立ち（前書き）

今回もまた短いです。

毎回毎回読んでもらって本当にありがとうございます。

旅立ち

「せいつ。…………ふう」

戦闘訓練を終えた俺は周りに張つてある結界をといた。

「相変わらず凄いな、お前の剣技は。その一振り一振りがまさに極地、あのサムライマスターですらお前の前では霞んでしまうな。」

そう声をかけてきたのは13、4才ぐらいの金髪をなびかせる少女…………エヴァである。

エヴァと2人あの誓った日からもう数百年が過ぎていた。エヴァと一緒に過ごし、そして修行してきた結果なぜかエヴァが成長したのだ。エヴァの話によると俺と歩み始めてしばらくした頃に、夢の中で天使に会ったらしい。（容姿を確認してみたところ、俺が会っていた天使だったようだ。）

天使曰く

・桜花とゴニョゴニョ（声が小さくて聞こえなかった。）らしい

その話をしているエヴァの顔が真っ赤だったのが俺の印象だ。後は17才ぐらいで成長は完全に止まるらしい。

「桜花…………やはり行くのか？」

昔のことを思い出していたがエヴァの言葉に意識を戻す。

「ああ、やはり開戦するみたいだからな。戦争をする連中はどうでもいいが、それに理不尽に巻き込まれる人達を見捨てることは出来ない。俺が救えるのは少ないが…………信念を曲げて静観することはど

うしても出来ないんだ。」

「そうか、やはりお前は私を助けてくれた時からなにも変わらない。私はここで桜花の帰りをまつよ。だから必ず帰ってきてくれよ?」

エヴァは俺に抱きつきながら、そう言葉を発した。俺はエヴァの頭を撫でながら

「ああ、約束するよ。俺の帰る場所はエヴァの隣だからな。」

そう告げると俺はエヴァから離れ魔法世界へと旅立った。

「頑張れよ。『守護する者』よ。」

そうつぶやくエヴァの言葉を背中に受けながら…

紅き翼との出会い、そして別れ（前書き）

お気に入り登録が50件になりました。本当にありがとうございました。
す。

これからもよろしく願います。

紅き翼との出会い、そして別れ

エヴァと別れて魔法世界に来てからもう数ヶ月が過ぎていた。

エヴァは大丈夫だろうか、原作通り『闇の福音』や『ドールマスタ―』という二つ名がついているが俺がいない間に襲撃されないか心配だ。俺にも二つ名はついた。『守護する者』『闇と在る光』『精霊の加護を受けし者』だ。

一つ目は弱者を助けていたことからついた名だ。

二つ目はエヴァと『闇の福音』といるからだな。

三つ目は俺の能力に関係しているのだろう。

数百年の永きに渡る修行で俺は身に纏う魔力に属性を付加する事に成功した。これにより纏った属性の攻撃はきかなくなり、さらに、撃や・斬にも属性を付加する事が出来るようになった。それに合わせるかのように、エヴァは原作では未完成だった『闇の魔法』を完成させていた。完成した後エヴァが

「これで桜花と同じ事ができるようになったぞ。」

と嬉しそうに言っていたが

「それは、あまり使用するなよ?」

と俺がそう告げると

「な…なぜだ?この技はお前に並びたくて作っただぞ?それに桜花のおかげで完成した技でもあるのに、なぜだ?」

と目尻に涙を浮かべながら訴えてきた。それに俺は

「エヴァの綺麗な身体が黒くなったりするのを見たくないだけだ。俺のわがままだけでも、聞いてくれないか？」

俺の言葉を聞いたエヴァは頬を薄く染め

「そ…そうか。そういうことならばわかった。だ…だが、桜花が危険なときは躊躇なく使うからな。これだけは譲れん。」

と決意を宿した瞳で俺を見ていた。

「ああ、そんな時が来ないように精進するよ。」

エヴァを優しく抱き締めながらそう答えていた。

……………つと

なぜか昔を思い出していた。俺は今、ある2人の闘いを見学中である。ナギとラカンの初会合のあの闘いである。2人が闘い始めてから数時間が経過し、辺りの地形が変わり始めていた。その時、あるものが俺の目に映った。それを認めた瞬間に2人に俺は・氷撃をたたき込んでいた。（付加した属性により、・氷撃・炎撃等がある）

S i d e アル

食事中にジャック・ラカンと名乗る男が襲撃してきてから、最初は詠春がそして今はナギが戦闘中です。やはりあの男もバグですね！2人が闘い始めてから周りの地形が僅か数時間で変わり果てていきます。それにまだまだ終わる気配が見られません。

「むっ！」

「どうしましたか？ゼクト。」

当たりを見回しているゼクトに訪ねますが

「いや、今ほんの一瞬膨大な魔力を感じたんじゃ。」

「それは敵が近くに「あれは」どうしたんですか？詠春？」

詠春が驚愕した顔で見ている方を向いたとき

「なっ」 × 2

なんとも信じられない光景が広がっていました。先程まで闘っていたナギとラカンが顔以外の全身を氷漬けにされていたからです。

「全く、この子にまで被害が及んだらどうする。」

Side アウト

俺は、攻撃の余波にさらされて怪我をしたらしい鷹を治療しつつ顔以外を氷漬けにした2人の側に降り立ち

「全く、この子にまで被害が及んだらどうする。」

まあ、余波は受けていたんだかな。

「まあいい。」

そうつぶやくと氷を溶かし2人を自由にした。

「お前はいつたい何者だ。」

警戒しながら俺に問いかけてくる。無理もないか、気づかないうちに何時の間にか氷漬けにされたのだからな。俺が意識をナギに向けていると

「もらったー。」

ラカンが俺の死角から攻撃を仕掛けてきた。問答無用で氷漬けにされたことで俺を敵と判断したらしい。このまま防御してもいいのだが、それでは腕の中にいる鷹に被害が及んでしまう。そこで俺は、ここ数十年エヴァと共に練磨していた合気を使うことにした。

（対人で使うのはエヴァ以外では初めてだからな、どの位使えるものか試してみるか。）

そう考えた俺は、ラカンの拳をいなしそこに自信の気を添えて地面に叩き落とした。

ドゴン！！

（成る程、結構使い勝手のいい技だな。しかしこの威力は……強者以外には気や魔力を付加しない方がいいな。）

俺は、ラカンを叩き落とした所を見るとそこには、およそ直径3メートル程のクレーターが出来ていた。

「ぬうん！……ちつ、俺の気合い防御を超えてダメージを喰らわせるとは、あんただだもんじゃないな。」

クレーターから出てきたラカンは膝を着きながら悔しそうに言葉を発していた。それをみた俺は

（ラカンが膝を着いたか、やはり付加は強者以外には使えんな。普

通の魔法使いならば潰れていただろう。)

「すまん。お前達の戦闘の余波でこの子が傷ついていたので、これ以上被害が広まる前に止めさせてもらった。」

「なあー、あんたもしかして『守護する者』か？」

俺の言葉から予測したのだろうナギがそう聞いてきたので

「ああ、そうだ。お前達は『紅き翼』だろう？」

「貴方ほどの人に覚えられているとは、私達も有名になりましたね。それとナギ？彼には喧嘩を売らないでくださいね。」

俺から殺気や闘志を感じなかったからだろう、残りのメンバーが近寄ってきてアルがナギに釘を刺していた。

「へっ！俺もそうバカじゃねえよ。今、こんな大物に喧嘩を売るつもりはない。」

「いや、バカでしょう（じやろう。だろう）。今ではなくとも売らないで下さい。あなたは一応私達のリーダーなのですから。」

仲間からのツッコミで若干落ち込んでいるナギを尻目に

「取りあえず、自己紹介をしようか。俺は暗夜桜花。まあ、周りからは『守護する者』や『闇と在る光』などと言われているがな。それとこちらに戦闘の意志はない。」

「そうですね。私はアルビレオ・イマと言います。アルと呼んで下

さい。あなたに喧嘩を売ったら私達では全滅ですからね、そんな命知らずではないですよ。ナギをのぞいてね！」

「おいアルつ。俺はナギ・スプリンフィールド。なあオウカいつかやり合おうぜ。」

「だから喧嘩を売るなというに。俺はゼクト。このバカの師匠でもある。」

「私は、近衛詠春。ちょっとその刀を見せて貰えませんか？」

「ナギにゼクト、アルに詠春か。そこのはなんて名前なんだ？」

俺は回復したのか立ち上がりこちらを見ていたラカンに声をかけた。

「オレの名前はジャック・ラカンド。お前さん噂通りすげえ強さだな。」

「ラカンか。俺は自分の信念を貫き通すために鍛えたにすぎんよ。時間だけはたっぷりあったからな。」

それを聞いてなにやら考えていたナギが顔を上げ

「なあ、オウカにラカン。俺達の仲間にならないか？」

と聞いてきた。そこで俺は考える

（確かにこいつらと一緒にいれば、多くの人を助けることが出来るだろう。だが、ナギ達が訪れた場所以外では？……………よし、決めた。）

俺が考えている間にラカンは仲間にはいることにしたらしい。今は、

この場にいる全員が俺の言葉を待っていた。

「俺は、別行動するよ。」「何でだよ。」「話は最後まで聞け。確かにナギ達と行動すれば多くの人達を助けることが出来るだろう。たがお前達が行けない場所は？同時に複数の場所には存在できない。俺はお前達が行けない場所で助けを求めるモノ達を助けよう。後、これだけは覚えておけ。俺は今まで、正義の名の下に弱者を虐げる魔法使い達を数多く葬ってきた。お前達がそんな存在になったとしたら俺は、躊躇なく葬る。」「

俺の言葉を聞いたナギは

「へっ！そんなことしねえよ。」「

笑いながらそう答えてきた。俺は見渡すと全員が決意を秘めた目で俺を見つめていた。

（こいつらなら大丈夫だろう。）

「そうだな。お前達ならば大丈夫だろう。それに何時かは道が変わる時が来るだろう。それまで、楽しみにしているぞ。特にナギ、あんちよこ使用して魔法も5、6個では話にならんからな。せいぜい腕を磨いておけよ！」「

俺は笑いながらナギ達に背を向けて歩き出した。

「へっ！そんな時は俺の成長ぶりに驚かせてやるよー。」「

そんなナギの楽しそうな声を聞きながら……

ん？………

なんか忘れていたような。あつ………詠春に刀見せるの忘れてた。

案の定、俺が去った後で詠春が落ち込んだのは後から聞くことになった。

紅き翼との出会い、そして別れ（後書き）

ご指摘、ご感想ありがとうございます。

これからより良い文章を書けるように頑張っていきます。

決戦・そして……（前書き）

ようやく書き上がりましたので投稿します。
次話も少し空きますが、少しでも早く投稿出来るように頑張ります。

決戦・そして……

『紅き翼』と別れてから、更に数ヶ月が過ぎた。

（そろそろ、決戦間近か。）

俺は今、街に攻め入ろうとしていた荒くれどもを全滅させたところだ。どうも戦争にかこつけて街を襲撃しようとしていたらしい。俺は片づけが終わると町の方を振り向いた。そこには俺に対する恐怖や畏怖の目があった。

（俺の力を目の当たりにすれば当然か。）

だが中には、感謝の表情や助かったことで笑顔のモノもいる。これだけで俺の心は満足する。

【桜花様】

すると使い魔からの念話が聞こえた。

使い魔はあの時の鷹である。助けたまでは良かったんだが、あの後傷が癒えても俺から離れずに行動を共にしていたが、ある戦闘で重傷を負ってしまった。あれは俺の我が儘ではあったがこのまま死なせるのはしのびなかったので血の契約を交わし使い魔としたのだ。今では並の魔法使いよりも強くなってしまったがな。

【どうした桜？何か動きがあったのか？】

ちなみに桜とは鷹の名前だ。雌だったので俺の名前から一文字とってそう名付けた。

【はい。桜花様に言われたとおり『紅き翼』の行動を観察していましたが、どうやら敵の本拠地を発見し、これから現地に集結し最終決戦を行うようです。】

【成る程。それで場所はどこだ？】

【場所は

王都オスティア空中王宮最奥部の「墓守り人の宮殿」

のようです。】

【分かった。これから俺もすぐにそちらに向かう。くれぐれも無茶はするなよ！】

【わかっています。御主人様／＼／＼】

（全く、御主人様は止めると言ってるのにな。）

俺は桜との念話を終えると、風の魔力を身に纏い決戦の舞台へとむかった。

Side ナギ

俺達『紅き翼』はオウカと別れてから様々な戦いに身を投じてきた。その過程でガトウやタカミチといった新たな仲間が増えて過ごしてきたんだが、この大戦の黒幕が『完全なる世界』という奴らということがわかり今は、奴らの本拠地であるここ「墓守り人の宮殿」に集結している。

「全軍配置に付いたみたいですね。」

「そうじゃな、それにしてもこの敵数は……………」

後ろからアルとお師匠様が声をかけてきた。そう今日の前には
敵、敵、敵……………眼前を埋め尽くす敵

「多すぎだろ。情報と違いすぎる！」

詠春が敵を見て叫んでいる。ここにいる全員がそう思っているだろう。

（くそっ！初めの予定じゃ、俺達『紅き翼』が敵本拠地奥深くに乗り込むつもりだったのに、これじゃ乗り込めたとしても表に残ったこいつらは全滅しちまう。かといって俺達も残ればなんとかなるかもしれないがそれだと姫子ちゃんを救えない。これだとガトウ達間に合っていたとしてもどうにもできないだろう。）

「くそっ！」

「ふむ。諦めるのか？どんな敵であろうとも、乗り越えるのがお前達人間の強みだろうに。」

Side アウト

俺が桜と合流して決戦場に到着すると、眼前には全てを飲み込もうとする大軍の敵。

「これではナギ達も一筋縄ではいかんだろうな。」

【桜花様、どうされますか？】

「まずは、ナギ達に合流しよう。話はそれからだな。」

俺は、ナギ達に合流するべく、ナギ達がいるであろう本陣らしきところに向かって飛んでいった。

向かった先にはナギが苦い顔をしながら眼前の敵を睨んでいた。

「くそっ！」

ナギが悪態をついた。その姿が俺には、何かを切り捨てなければならぬ状態で、それしか選択するしか出来ない自分に対する情けなさからくるものなのだろうと、何故かそう感じた。

「ふむ。諦めるのか？どんな敵であろうとも、乗り越えるのがお前達人間の強みだろうに。」

俺は、この数百年で見てきた後景を思い出しそう口にしていた。

・数百の悪魔を前にしても、後ろにいる大切な家族を護るために限界を超え殲滅した男がいた。

・世界と彼女を天秤にかけられ心を砕きながらも、彼女が愛した世界を護るために強大な敵を打ち倒した男がいた。

・その男の理想は全てを救うこと、だが男は全てを救えないことを何度も経験し知っていたが、それでもその理想は美しいと、間違っていないとその理想を追い求め続けた。最後の瞬間まで残酷な運命との戦いをやめることはなかった。

だから俺は知っている。人の奥底に眠る凄まじいまでの力を、もってその男達はどう呼ばれた

『英雄』

と……

ナギもそんな男達と肩を並べるだけの素質は持っている。だが今ナギは、その優しさから動けないでいた。そんな優しい男のために一肌脱ぐのもいいのかもしれない。

「ナギ、なにを悩んでいる。お前はバカなのだ。バカなんだからただ真っ直ぐと進め！お前には沢山の仲間がいるんだ。独りで悩まずに頼れよ！」

「オウカ……………」

俺の言葉を聞いていた他の仲間達も力強い眼差しをナギに送っていた。

「へっ。俺としたことがウジウジと悩んでたみたいだな。ありがとう、オウカ。」

「気にするな。それにしてもナギが礼を言うなんて成長したな。」

ナギの礼に俺が苦笑して返すと

「俺も成長したのさ。もうお前と出会った頃とは違うんだよ！」

「では見せて見る。道は俺が切り開く！こちらのことは気にせずに存分に暴れてこい。」

「ああ、頼んだぜ。行くぞ！野郎共」

「……………」

では行くか。俺は気を練り上げそれを螺旋状にして道を切り開くべく撃ち込んだ。

・螺旋砲撃

その一撃はモーゼの十戒のように敵を二つに分断した。

「行け！」

その言葉と共に『紅き翼』が突き進んでいった。

決戦が始まってからしばらくたったころ、すでに残りの敵の数は壊滅寸前まで減っていた。

（こちらはもう大丈夫だろう。ん…？
ゾクッ

なんだこの感じは……）

【桜花様、あれを】

桜の示す方向を見ると、ナギが敵と思われる者と一緒に強力な波動を放つ魔力の光に貫かれているところだった。

「まずい！」

俺はナギ達を救出するために全力で飛んだ。

（くっ！2発目はなんとかナギとゼクトで防いだようだが、これ以上は無理だ！）

俺がそう思った刹那、3発目が近づいているのを感じた。

（間に合えっ！）

俺は、3発目の着弾寸前になんとか割り込むことに成功し、すぐさま防御壁を展開、間一髪で『紅き翼』に被害が及ぶのを防げたが、更に4発目、5発目がこちらに向かっているのが目に入った。

（ちっ！さすがにこのままでは俺も持たん。）

俺は気と魔力を最大限にまで練り上げ防御壁を強化した。

何とか防ぎきることが出来たが、そこに絶望の6発目が近づいていた。

（俺は、こんな所で終われない。帰りを待っているヤツがいるんだ。）

「雄雄雄雄雄雄おお………」

俺は防御壁に不死としての体に満ちる生命力すらも注ぎ込んだ。

パリーン

防ぎきると同時に防御壁が甲高い音を立てて割れた。

俺は全てを出し切り朦朧し、薄れゆく意識の中、エヴァと見知らぬ少女がこちらを心配そうな表情で見っていた。

（そんなに心配するな、俺はかならず…かえ……る…から）

そこで俺の意識は深い闇に沈んでいった。

決戦・そして……（後書き）

キャラの呼び名や口調など色々変化してしまいました、こんな作者ですが呼んで貰えるところ嬉しいです。

目覚め（前書き）

仕事が忙しくなり、取りあえず書けたところまで投稿します。
GWまでに、後1〜2話ぐらい投稿出来るように頑張ります。
今回もまた、短いですが読んで貰えるところ嬉しいです。

目覚め

意識が浮上する。深海から海上を目指す空気のようにゆっくりと浮上していく。

「ん……ここ……ここは？」

俺が最初に見た光景は…

「木の……ね……？」

そう木の根だった。頭上には巨大な木の根が張り巡らされていた。自然発光なのか、それとも魔力的もしくは科学的なものかはわからないが、この空間は光に満ち溢れていた。

ギィ…

音のした方を見ると、14〜5才の少女が水の入った桶とタオルを持って入って来るところだった。

少女の外見は漆黒の髪、黄色の鋭い目、小麦色の肌をしていて、動物に例えるならば鷹だろうなと俺は思った。ん……？…鷹…？

バシャーン

俺が起きているのを見た少女は、驚きで桶を落としその鋭い目に涙を一杯に溜ながら

「ご…御主人様〜！」

ガバッ

ポロポロと涙をこぼしながら俺の胸に抱きついてきた。

俺は混乱していた。目覚めてみれば見知らぬ場所にいるし、突然美少女といっても過言ではない女の娘に抱きつかれ、御主人様………

…？

（御主人様？…それにこの声はどこかで……はっ！）

俺は少女を見つめ

「もしかして…桜か？」

「御主人様」

俺の言葉に少女…桜は更に涙を流しながらきつく、きつく抱きしめてきた。

Side 桜

あの決戦で御自身の力を全て出し尽くし『紅き翼』の皆さんを守った御主人様が、眠りにつかれてからも、十数年がたちました。御主人様が倒れた後の戦いはゼクトさんを失いながらもこちら側が勝利を収める事が出来ました。私はその後、眠り続ける御主人様を倒し名を上げようとする輩から、御主人様を守りながら各地を転々としていました。そして旧世界に渡り、結界が張っており、魔力が満ちている巨木を見つけ、侵入しここ数年隠れ住んでいます。侵入は割と簡単になることが出来ました。御主人様から情報収集に必要なと教わった認識障害の魔法で成功しました。これはかなり高度で探知結界にもかかりません。御主人様に近い実力を持っていたとしてもちよつとした違和感を感じる程度です。ここに隠れ住んでから数年、毎回毎回扉を開けるとご主人様が起きているのではないかとい

う期待をしながら扉を開けます。ですが何時も眠るご主人様を見て少し落胆します。

（今日こそは起きて下さるでしょうか。）

そして今日もまた、期待を胸に扉を開けます。

ギィ…

扉を開けて、御主人様が眠るベットがある方を見ます。

（え……？）

そこには恋い焦がれた御主人様が起きていました。ですがその姿は、すぐに歪んでしまいます。

バシャーン

私は、手に持っていた桶を落とした音で我に帰りました。私はいてもたってもいられなくなり

「ご…御主人様」

御主人様の胸に飛び込みます。急に抱きつかれたことに御主人様は、一瞬混乱した顔をされていました

「もしかして…桜か？」

わかって下さった。人型の私を初めてご覧になったのに、御主人様はわかって下さった。

私は御主人様が倒れた後、御主人様を守るために風の精霊達の力を得て人型になりました。

（御主人様…愛しの御主人様が目覚めて下さった。それに人型の私を見ても、すぐに私だと見抜いてくれた。ああ…）

「御主人様」

私は御主人様の温もりを確かめるように、きつく、きつく抱きしめた。

S i d e アウト

俺は、抱き締めてくる桜を安心させるように、優しく抱き締め、頭を撫でながら

「心配かけたな桜。もう大丈夫だから、泣きやんでくれないか？」

俺の言葉を聞いた桜は、まだ目尻に涙を溜めていたが、それでもほえむ返してきた。

「それで、ここはどこで、何故桜が人型になっている？」

桜から今までの経緯を聞いた俺は、自信が十数年もの間眠り続けていたことを知った。

「そうか、今まで桜には迷惑をかけたな。すまなかった。」

「頭を上げて下さい、御主人様。私はあなたの使い魔です。御主人様を護れることは、私にとってなによりも優先されるものです。」

「使い魔だろうがなんだろうが助けられたら礼をするのは当たり前のことだ。だから、ありがとうな桜。」

「御主人様っ。」

「桜花、だろ？桜」

「はい。桜花様／＼／／」

「それにしても、十数年間眠り続けていたとはな。どうりで身体能力等がだいぶ落ちてゐるわけだ。」

俺が自身の体の調子を調べてそう口にすると、桜がベットの脇に置いてあったバックから丸いガラスにミニチュアの入ったものを取り出すと

「それでは、別荘をお使いになれますか？中は依然使われた時のままです。私も修行のために、時折使わせて貰いました。時間設定も依然と同じでこちらの一時間が中の一年になっています。」

「そうか、それならちょっと設定を変えたら早速中に入るか。」

俺は、別荘に手を当てると目を瞑り術式を少し変更した。

「何をされたのですか？」

「別荘内の重力設定を起動させた。」

「重力設定ですか？」

ちよつと？な顔をしている桜が首を傾げながら聞いてくる。

「今発動させたのは、この中に入ったもの個々にそのものが耐えられる最大重力の半分の負荷が、かかるようになってゐる。力が上がれば上がるほど負荷も増えるから、修行にはちょうどいいんだ。そ

れじゃあ早速行くか桜。」

「はい。」

そう言つて桜をつれて別荘に入つていった。

（一時間後）

ドテッ

「きゃっ！」

別荘から出てくると同時に重力が元に戻り、それでバランスを崩してしまつた桜が尻餅を着いてしまつた。

「大丈夫か？桜。」

「はい。大丈夫です。」

俺が手を差し出すと恥ずかしさからか頬をつつすらと紅く染めて手を握り返してきた。

「取りあえず力も取り戻したし、外に出るか。桜案内を頼む。」

「それでは、御案内致します。桜花様。」

俺は、桜に先導され外に向かった。

目覚め（後書き）

次回は、ある人との再開と、過去話を書きたいと思っています。
時間が空きますがどうぞこれからも、よろしく願います。

再会・想い（前）（前書き）

お久しぶりです。体調を崩してしまい、全然書けませんでした。今は少し回復してきたので、取りあえず書けたところまでを投稿しようと思います。

まだまだな文章ですがこれからもよろしく願います。

再会・想い（前）

「やはり、あの木の根は世界樹だったのか。ここは麻帆良というところか。」

「それでは、これからどういたしますか。認識障害の魔法を、桜花様に張り直していただいたので、見つかることは無いと思いますがどうされますか？」

世界樹を見上げながら場所の確認をしていた俺に、桜が今後の行動を聞いてくる。俺は、世界樹と寄り添うように見える満月を眺めながら、自分の片割れと誓った少女の事を考えていた。

（エヴァ…君は今どうしているだろうか……。君を20年近く独りにして、こんなに待たせてしまった俺でもまた受け入れてくれるだろうか、君は……。ん？この気配は…エヴァ…君なのか？だが今は満月、君がもつとも光輝ける時間帯なのにどうして、こうも気配が弱まっている？それにどうして君がここにいる？くそっ！考えていても仕方ないか。）

「桜っ！今、これからを考えるのはちょっと待ってくれ。最優先で確認しなければならぬことが出来た。」

そう言つて突然険しい表情をした俺に、困惑した桜を連れてエヴァの気配がする方に…恐らく戦闘中なのだろう、大量の邪気の気配がする方に桜を伴って駆けだしていった。

Side エヴァ

ここ麻帆良の地に封じられてもう13年が過ぎていた。魔力が封じ

られ従者であるチャチャゼロも動けなくなってしまった。桜花の情報を集めることも出来なくなり、ついこの間出来上がった新しい従者である茶々丸が出来てから、自分では扱えなかったパソコン等を使って情報収集をさせているが、桜花の情報は無く、また、私をこの地に封じたナギの情報も8年前に死亡したと聞いたときから後の情報はいつさい無かった。

（13年前）

「とうとうこの極東の地、日本でお前を追い詰めたぞ。『サウザンドマスター』ナギ・スプリングフィールド!」

私は砂浜で『紅き翼』の一人ナギを捕らえることにやっとのことで成功した。桜花が死んだと聞いた私が自暴自棄になっていたとき、誤って崖から落ちてしまった私を助けたのがこいつだった。その後、ナギが『紅き翼』だということを知った私は、桜花の情報を得ようとナギを追いかけたのだ。

「お前は、何で俺を付け回す。暇なのか？」

「貴様には、聞きたいことがある。」

「聞きたいこと？」

「桜花のことだ!」

「桜花…か。」

私が桜花の名前を出すとナギは、少し辛そうな顔になり

「へっ！だったら、力ずくで聞き出してみな。」

不敵な笑みを浮かべそう言ってきた。

「もとよりそのつもりだ。行くぞ！チャチャゼロ。」

「ケケケ…マアコロサナイヨウニキヲツケテヤルヨ。」

私とチャチャゼロが同時に飛び出すが、ナギは構えるでもなく、地面を見つめ

「この辺だったか？」

「ふっ！よそ見とは余裕だな！」

私とチャチャゼロがナギに攻撃しようとした瞬間、視界が急降下した。

ドボン

「いやゝ。うまい具合にハマったな。」

上からナギの声が聞こえたとき私は、自分達が落とし穴にはまった事を知った。

「貴様っ！卑怯だぞ！」

「へっ！勝負に卑怯もくそもあるもんかよ。」

「マア、タシカニソウダナ。」

「チャチャゼロ貴様までなんだ。…まあ、確かにそうだが、貴様これから私をどうするつもりだ。」

落とし穴には、私の弱点でもあるニンニク等がたくさん浮かんでいた為、すぐには反撃が出来ないと判断した私は、ナギが何をするのかが気になった。

「ん」。近衛のじいさんが優秀な警備員を欲しがっていたから、取りあえず封印だな。それに麻帆良にいたらお前にもいつか良いことがあるさ。」

「私が望むのは桜花だけだ！それ以外は望んでいない。」

私が喋っている間にナギは呪文を完成させて

「“登校地獄”」

呪いを掛けられた私は徐々に薄れゆく意識の中で

「俺も、自分のゴタゴタが片付いたら呪いを解きに行つてやるから、それまでは静かに暮らしてな。それに桜花も……」

最後まで聞くことが出来ずに、私の意識は落ちていった。

（回想終了）

今日は侵入者が多く、じじいから出動要請がきたから、茶々丸の実戦訓練も兼ねて出てきたのはいいが、敵は今回徒党を組んで襲撃してきた。

後で分かったことなのだか、今回は二つの組織が手を組んでいたのだ。通常なら牽制しあって協力などしないのだが、今回手を組んだ二つの組織は狙いが違ふことで協力していたらしい。狙いは、図書館島にある強力な魔道書、そして今年から同じクラスになったじいの孫である近衛木乃香だ。以前、別々に襲撃してきて撃退された組織は、目的が重ならない事もあり手を組んだそうだ。

（しかし、ここまで苦戦したのは何時ぶりだろうか。）

今私と茶々丸は、苦戦…いや追い詰められていた。途中までは、召喚された鬼共を相手に戦っていたが、最後に残った奴が厄介なモノだった。

「ちつ、なんなんだコイツは、叩き潰しても還らん鬼なぞ聞いたことがないぞ。」

「マ・マスター…逃げて下さい。」

私の言葉に反応したのは、半壊した茶々丸だった。いくら叩き潰しても死なないコイツを滅ぼすには完全に消滅させるしかないと解つたのは私の魔力が切れる直前だった。茶々丸がそれを伝えたところで、私の魔力が切れ身体能力の落ちた茶々丸はヤツの攻撃を避けきれずに攻撃を受けて半壊してしまった。

「お前はそこで見ている。」

だが、どうすればいい…。増援？…くるならとつて来ているだろう。ということは、他の所も手こずっているということだ。

「ガアアアアア…」

鬼が突進してくる。

（くそっ！考えがまだまとまらん。）

私は迎撃するために気での強化を更に高める。

ス…

「（…ん？しかし奴はどこに向かって…）っと、いかん…茶々丸…」

奴は私ではなく、弱っている茶々丸に向かって突進していく。

（茶々丸に対しての距離はほぼ五分！間に合え…）

私は、持てる全ての気で足を強化して駆け出した。

ドゴンッ

「があ…」

「マスター！」

茶々丸を庇い奴の攻撃を背中に受けた。気を足に集中していたために背中は無防備に近い状況で攻撃を受けたために、肋骨と背骨にひびが入ってしまった。激痛を無視して背後を振り返り鬼を見つめる。（この傷ではもう…、桜花…最後にもう一度お前に逢いたかった。

私はここで地に還るかもしれない。私の理想は桜花の腕の中でチャヤゼロや茶々丸に看取られながらというのが理想だったんだがな…。だが、ここで終わるのだとしても私は…）

「私はエヴァンジェリン！エヴァンジェリン・アナタシア・キティ・マクダウェル。悪の魔法使いにして暗夜桜花と共に在るもの。その姿その目にしかと焼き付けよ。」

私は枯渴仕掛けしている気と魔力を無理やり引き出し高らかに名乗り

を上げる。

「ガアアアアア」

私の高らかな名乗りを受けて鬼がそれに答えるように叫びこちらに向かつて突進してくる。後ろで茶々丸が何か叫んでいるようだが私は疲労と激痛、それに加えて力を無理矢理に引き出したことにより意識をつなぎ止めているのがやっとで、言葉を理解することが出来なかった。必死に意識をつなぎ止め鬼を見据える。奴はその肥大化した腕を振り上げて私に突っ込んでくる。そして、地面が陥没するほど強力な踏み込みから腕を振り下ろしてきた。その攻撃が私に当たる刹那、あたり一面が光に包まれた。私は、その光の中に桜花の姿が見えたような気がしたが、私の意識は光の中から一転して闇に落ちた。

S i d e

アウト

再会・想い（前）（後書き）

GW中には体調を戻して1〜2話ぐらい投稿出来るように頑張ります。

ご意見、ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

執筆停止のお知らせ

これまで読んで下さった、皆様には本当に申し訳ないのですが、仕事を立て込み、私生活においても、精神面が追い詰められるといった事態になってしまいました。

仕事が落ち着き、精神面も回復いたしましたら、続きを書きたいと思っています。それまでの間無期限の執筆中止となります。執筆を再開した際はまた読んで貰えるとうれしいです。それではみなさま、またいつかお会いいたしましょう。これまで読んでいただいて本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6170k/>

ネギま！転生ですよ！

2010年10月10日20時42分発行